

論文の要約

報告番号	① 乙	医 第 1308号	氏名	西野 豪志
学位論文題目	Gender differences in clinicopathological features and prognosis of squamous cell carcinoma of the esophagus			
<p>【背景】 食道癌は男性に多い疾患であるが、女性の食道癌は予後良好であるという報告やより早期で診断される傾向があるという報告など、女性に有利な報告が散見される。これらの理由として、これまで免疫応答の差異や性ホルモンやホルモンレセプターの関与などが検討されているが、いまだ一定の見解が得られていない。食道癌の臨床病理学的特徴や予後の性差を明らかにする目的で、食道癌切除症例を男女に分類し、比較検討した。</p> <p>【方法】 2004年1月から2013年3月までの期間に当院で切除を行った食道癌170例を男性142例、女性28例に分類し、その臨床病理学的特徴と予後を検討した。</p> <p>【結果】 男性で有意に喫煙率が高く ($p < 0.001$)、Brinkman index も有意に高値であった ($p < 0.001$)。飲酒歴についても同様で、男性で有意に高い結果であった ($p < 0.001$)。飲酒により顔面が紅潮する(フラッシャー)率は、男性で高く ($p = 0.002$)、男性でアルデヒド脱水素酵素活性がより低く、食道癌のリスクが高いと考えられた。臨床的要因として、主占拠部位や組織型、併存疾患の有無、T因子、N因子、臨床病期、術前治療の有無には男女で有意差を認めなかった。術前化学療法を行った症例に限定すると、切除後の病理検査でGrade2以上の組織学的治療効果が認められた症例は、女性に有意に多く ($p = 0.048$)、化学療法の感受性は女性がより高いと考えられた。食道癌の化学療法耐性や予後を反映するバイオマーカーとして有用とされている p53 蛋白の免疫染色の結果、男性で有意に高い発現率を認めた ($p = 0.007$)。術後合併症の発生率を比較すると、男性で有意に高いという結果であった ($p = 0.024$)、生存率を比較するといずれも男性で有意に予後不良であり、5年生存率は男性 46.2%、女性 76.7% ($p = 0.045$) であった。Cox の比例ハザードモデルを用いた多変量解析では、女性 (HR:0.508, $p = 0.023$)、深達度 (HR:0.572, $p = 0.018$) が独立した予後因子として抽出された。</p> <p>【結語】 食道癌は女性が有意に予後良好である。その要因のひとつとして女性において p53 遺伝子変異が乏しく、化学療法の感受性が優れていることが考えられる。</p>				